
フェリとイタリの神隠し

Arthur

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェリとイタリの神隠し

【Nコード】

N0754Z

【作者名】

Arthur

【あらすじ】

そこにたどり着いたとき、俺は、何故ここにいるのかも、どうやってここに来たのかも、何も覚えていなかった。幾ら記憶の引き出しを開けても。普通の日常の狭間から入った別世界。そこで、俺はアイツと出会ったんだ・・！！

ヘタリア二次創作 フェリとイタリの神隠し小説化してみた

アイツとの出会い（前書き）

この作品はsm9603265（フェリとイタリの神隠し）に心打たれ「そうだ。小説書こう。」と思い書いたものです。ところどころ文法変だつたり、話が掴みずらかつたりしている可能性が大いに考えられますので、あ。無理。という方は読まないことをお勧めします。だいたい許せる。というアマゾン川並みの心の広さの持ち主の方は読んでみるのもよいかもしれません。やさしいアドバイス待っています。

アイツとの出会い

イタリア君の世界からはじまります。

——ありえない場所があった。ありえないことが起こった。そこは、ふとした日常の片隅に存在する狭間の世界。そこは、この世の者が入ってはいけない世界——

「ここは、一体どこなの・・・？」

俺は、広い草原に立っていた。そこには青い空が広がり、ところどころによく分らない石像が無造作に散らばっている。

（俺・・・確か、日本の家に遊びに来たら日本とはぐれちゃって、トンネル見つけて、ここに・・・）

記憶を辿っても、どういう道をたどってきたのか、何故あのトンネルに入ろうと思ったのかが分からない。幾ら思いだそうと思ってもトンネルに入るところからしか詳しく思い出せなかった。何をしたいか分からない俺は、とりあえず草原を見渡した。

「ん・・・？遠くに街・・・かな？」

行ってみようか・・・。そう思いながら俺は足を進めた。

「ふー。ついたー。あれ？でも誰もいない・・・。まだ昼なのに・・・」

（とりあえず、ちょっとあっちまで歩いてみようかな・・・。）
しばらく歩いたが全く人の気配がしない。何やらおかしいとは思ってたが俺はしばらく歩を進めた。ある程度進んだところに大きな建物があつた。

（なんだ・・・これ・・・。）

煙突から煙が出ていることから中に人がいることは分かった。なにやら上のほうには旗があつて「眉」と書かれている。しばらくその

建物を見ていたらぼーっとしてしまっていたようで。

ーガタンゴトン・・・-

俺はその音でぼーっとした世界から抜け出した。

「あ・・・！電車の音?!」

そう思い建物までの道にかかっている橋の下を覗き込んだ。

「ここで何をしている!!」

突然、後ろから聞きなれた声がした。

(この声は・・・)

そう思い後ろを振り返ると少年が立っていた。何やらこわばった顔をしている。

(あれ・・・？ドイツみたいだけど・・・ドイツじゃないのかな・・・。
前髪垂らしてるし・・・。)

「帰れ！ここはお前のいるべき所じゃない！」

少年は言った。だが、いきなり言われても何が何だかさっぱりだ。

「え・・・？」

そう言ったのとはば同時にさっきまで見ていた建物に明かりが灯された。

「つつっ！！もう明かりが・・・！俺が時間を稼ぐ！その間に！早く！」
その少年はそう言いながら俺の背中を強く押した。

俺は、何が何だか分からなかった。ただただ、走り続けた。俺が走ると平行に進むように街灯や店の灯りがついてゆく。それに何だか黒くて半透明のものが街を歩いている。それもたくさん。その物体にぶつかりそうになる。しかし、そんなこと考えている暇はない。しばらく走った。そして、街を抜けた。

(トンネルまで戻らなくちゃ・・・!!)

ージャバジャバ・・・！-

「?!」

トンネルまで行こうと街に来る途中に上った階段を降りた。すると体の腰辺りまでが冷たい水に触れた。

（水！？）

俺は水から抜け出そうと降りてきた階段を上り、階段の上に立った。先ほどまで目指していたトンネルには灯りがとまり、昼間は草原だったはずのところには水があつて川のようになっていた。遊覧船もある様で川にぷかりぷかりと浮かんでいる。

「嘘だ！嘘だ！！嘘だ！！これは全部夢なんだ！」

俺はその場に座り込んだ。

しばらくそうしていると、遊覧船が俺のいる岸に寄ってきて、中からさつき見た半透明の黒いものとは別の変なものがやって来た。

「うわあああ！！！！」

俺は急いで物陰に隠れた。どうしたらよいのか分からなくて、しばらくそこにうずもれていた。すると・・

——ザッザッ・・！！——

何かの足音がして、俺は化け物が来たのではないかと後ろを振り向いた。しかし、予想は外れていて、そこにはさっきの少年が立っていた。

「間に・・合わなかったか・・・。」

それが、

俺と少年の出会いだった——

アイツとの出会い（後書き）

この作品が初投稿です。読みずらかったりよく分からない箇所が山ほどあったと思います。最後まで読んでくださったその貴方！本当にありがとうございます！次話も書くつもりです。またまたですが、本当にありがとうございました！！

アイツの名前。(前書き)

トンネルをくぐった。そこには不思議の街が広がっていた。俺はそこでアイツと出会った。昔からよく知ってる、アイツに――。
ヘタリア二次創作 フェリとイタリの神隠し(ニコニコから)を小説化してみた。

アイツの名前。

――麻屋店主、アーサーの部屋――

「あーちゃー!!」

麻屋最上階に位置する俺の部屋。その窓から、やけにあわてている妖精さんが入ってきた。

「ん・・・どうした？街の見回りは・・・」

やってきた妖精さんは担当制の街の見回り組の一員で、今日はその見回りの担当だったからここにいるということは何か大変な事があったか、妖精さんがさぼっているかどちらかだ。後者はないと思うが。と、いうことは・・・

「!! 何かあったのか!？」

俺はかなり大きな声で妖精さんに聞いた。

「しよれがね・・・!!」

妖精さんは早口に俺に説明した。

「なんだって!？異世界人がこの世界に入って来たああ?？ルートはどうした?!アイツだって今日は見回り番のはずだろ!!」

ルートが来てから今まで、アイツが見回り番の時は全くと言っていいほど悪いことはなかったし、あったとしてもアイツがすぐになんとかしていたようだから、妖精さんがあわてて俺のところに来るなんてことなかった。

（しかも、異世界人が来たときに限って・・・!!ルートは何をしているんだ――?!）

――「君はさっきの・・・!!ねえ、ここはどこ!?!どうしてここに!?!君は一体・・・」

俺は少年にたくさん質問をしようとした。しかし、俺の言葉は少年

の言葉に遮られた。

「今話している時間はない！今頃、アーサーが手下を使ってお前を探している！！早く立つんだ！！」

少年は俺の手を掴んだ。俺は少年の手を頼りに立とうとしたが、足に力が入らない。俺が立てなさそうな事を感じ取ると少年は呪文を唱え始めた。

「In lhr em Testment im namen der wind und Wasser.よし、立て！」

少年は俺が答える前に走り出した。俺の足は意識していないのに勝手に動き、尋常ならざるスピードで街の路地裏を通り抜けていく。いつの間にやら大通りの方に出てきていて、その時にはもう歩いていた。そして最初に少年に会った建物へと向かっている。周りには遊覧船から降りてきたと思われる妖怪？たちや建物の中で働いていると思われる人たちがたくさんいた。しかし、俺のことが見えないようでみんな気にせず建物へ入っていったり、自分の仕事を続けている。橋の前に差し掛かる時、少年が息を止めるよう俺に指示をしたので俺は息を止めた。もうすぐ渡りきるところで・

「ルートヴィツヒさん！」

前に、何やらこちらに向かってくる女の子がいる。

（かわいいんだけど！！息持たないから！！ちよつとどいてえええ！！！！）

しかし、俺は我慢も限界で息をしてしまった。やばっ！俺はそう思いもう一度息を止め直したが間に合うはずもなく……。女の子は俺を見て一瞬時が止まったかのように言葉を失っていた。ほんの少しの間が空き、

「ルートヴィツヒさん・・それ異世界人ですか・・？今、中でえらい騒ぎになつとりましたよ・・！」

女の子は目を見開いて少年に言った。

「っち！！ばれたか！イタリア！こっちだ！！」少年は建物を囲む堀に付いている小さなドアを開け、目にもとまらぬ速さで俺を招き

入れた。

扉をくぐると庭があつてそこにある木の陰に隠れさせられた。

「ここにいれば、しばらくの間見つからない。いいか、騒ぎが収まつたら後ろのくぐり戸から出て階段を下れ。しばらく行くとボイラー室がある。そこにいるヤツに働かせてもらえるよう頼むんだ断られても粘り強く頼め！帰りたいとか弱事をはくな！逃げるな！！分かったな！？」

そう言っている間に、建物の中から「ルートヴィツヒ様」と少年を呼ぶ声が聞こえた。少年はその場を立ち去ろうと建物の方を見た。すると彼についての疑問が・・・。

「ねえ！！俺、君に教えてほしいことが・・・！！君はどうして俺の名前を知ってるの！？君は俺について知ってるの！？」

少し安心したのだろうか。さっきまで気づかなかった事が次々と頭に浮かんでくる。

「・・・・・・。俺はお前のことを昔から知っているのかもしれない。よく思い出せないのだが・・。ああ。俺の名はルートヴィツヒ。ルートと呼んでくれて構わない。用はもう済んだか？なら失礼する。」

俺は小さくうなずいた。それを確認すると彼は名前を呼んでいる人たちの所へと立ち去った。

（ルートヴィツヒ・・・・。ルート・・・かあ・・・）

アイツの名前。（後書き）

前、同じ内容話（2話）を新たな作品として掲載してしまったので、2話をはじめに見てしまった方がいるかもしれません。本当に申し訳ありませんでした！！一話の方も見てやってくださいね。2話まで読んでくださり、すっごく感謝感謝の気持ちでいっぱいです！次話もよろしく願います！

麻屋で職探し！（前書き）

不思議の街にある麻屋。そこで俺はルートと出会った。そして、イタリア、麻屋で職探し運動開始！！！！

麻屋で職探し！

俺はルートが建物に入った後しばらく木の影に隠れていた。もう建物の中は落ち着いているようで、これといって大きな声はしない。「もう・・・いいかな？」

俺は人に見つからないよう静かに、ルートが言っていたくぐり戸の方へ向かった。

―ギギギギ・・・

くぐり戸はかなり古いようで音を立てながら開いた。出たところにはルートが言っていた通り階段があった。想像していたのとはちょっと（かなり・・・かな・・・？）違っていたが。

（何これ！！階段なのは分かるけど、手すりないし！！落ちたら確実に死ぬよおお！ヴェー！！だれかあ！助けてええええ！！！！）

しばらく階段の前で白旗を振った。まあ、誰も助けになど来てくれないのだが。俺は勇気を振り絞り、壁にべったりくっつきながら階段をかなりゆっくり下った。3段ほど進んだところで・・・

―ばきっ！―

怪しい音をたてて階段の木が折れた。その瞬間、俺は反射的に階段を悲鳴を上げて走り降りる。あんなに大きな悲鳴を出したのにはばれなかったのがすごいくらいだ。

「ヴェ・・・ヴェエエエ！！怖かった」

気を取り直して前へ進・・・まなかった。金属製のドアにぶつかった。（もしかして・・・）

「ここって・・・さっきルートが言ってたボイラー室！？やった！着いたよ！やればできるじゃん、俺」

―ぎい　い　い　・・・

扉をあけるとそこはまだ部屋ではなくて、短い通路があった。前には人間らしきシルエツトが2つ、影で映っている。何やら声も聞こ

えてきた。

「あいやああ！！腕の見せ所ある！！ヨンス！すっかり石炭運ぶよろし！！」

「ういゝす！ 兄貴！石炭運びの起源は俺なんだぜ」

「・・・・・・。そうあるか。分かったからさつさと運ぶよろし。変なポーズとつても誰も見てくれないあるよ。」

「冷たいですね」 兄貴

何やらすつごく馬鹿らしい？話をしている。何だか入り込む隙がなかったがここで引き下がるわけにもいかなないので俺は通路を進み部屋に入り、そこにいる人に声をかけた。

「あ・・あのお・・ 俺イタリアデス！！パスタとピッツアが大好きなお茶目さんです！ここで働かせて下さい！」
すると、二人同時に振り向いて。

「あいやあ？何あるか？お前は？いきなり働かせてって・・・。」

「そうなんだぜ！俺たちは二人で楽しくお仕事してるんだぜ！お前に入る隙なんかねえんだぜ！ね、あーにき！」

「そうじゃねえある！！いきなり働かせろって言われても・・・。ここで働くなら、まずはあへんの許可を取らねえと・・・。」

しばらくの間沈黙が流れた。しかし、やけに声の大きな青年が奥のドアから入ってくるなり、二人に話しかけるものだから一瞬にしてその場の重い空気が消える。

「王躍^{ワンヤウ} 飯の時間やで」 あ、ヨンスもな。」

「ついでみたいに言わないでほしいんだぜ！！」

石炭運びをしていた方の少年は青年が来て楽しそうだったが、もう一人の葉らしきものを作っていた方の人はしばらく考え込むような顔をしていたがすぐに表情を変え、思いついたように言った。

「アントーニヨ！コイツをあへんのとこまで連れてくよろし！！」

「「「え????」」」

麻屋で職探し！（後書き）

どうだったでしょうか？話をまとめる脳力がないのだと思います。全然話が進みませんね。まだ話がジブリの方と変わりません・・まあ、頑張つてニコニコ動画での感動を皆様にお届けできたらなうと思ひます。ぐったぐったですが次話の方もよろしくお願ひします！読んでくれて本当にありがとうございました！！

麻屋最上階（前書き）

親分たちに出会って、俺は、この世界にもいい人はいるのだと知った。親分に案内してもらったたどり着いた麻屋最上階。これから、何が起ころのだろう。俺には、予想すらできなかった――。

麻屋最上階

「え・・・？ちよ・・・。王^{ワシ}、何言つとるん？てか、コイツって・・・？」

アントーニヨという青年はすごく「何言つてんだ？」みたいな顔をしている。

「コイツある。」

そう言つて王躍^{ワンヤオ}という名の薬を作っていた人は俺のことを親指を使つて指差した。

「え・・・人なんておつ・・・！！」

アントーニヨは全く俺の存在に気づいていなかったようで、指差された方向にいる俺を見て目を見開き、口をパクパクさせている。

「ちよ・・・！この人異世界人なん？！さっきまで上で大騒ぎになつたとたんやで！！なんでここにおんねん！！」

驚かないはずがない。正確にいうと人じゃないけど。そんなことを思つていたら王さん、とてつもないことを言い出して。

「我^{わたし}の孫ある。」

王さんは平然と言つた。

（え・・・！！俺いつからこの人の孫になつたの！？）

ヨンスも驚いた顔をしているが、王さんに口を押さえられているようにモガムゴムガ！としか言えず、何を言っているか分からない。

（あ・・・。もしかして、孫つてことにしてアントーニヨさんに、あへん？つて人の所まで連れて行つてもらえるようにしてくれてるのかも！！！）

こついうときは空気を読んでみます。

「孫おおおお？？？？？王、そんなんいたんか？！なんで俺に教えてくれへんねん！もゝ、はようロヴィーノに紹介してやりたいわあ！アイツ、子分欲しがってたんよゝ！」

アントーニヨさん、めっちゃ興奮してます。子分？何のことですか。

「まったく・・・。ロヴィーノに紹介する前にあへんに紹介すること、忘れちゃダメあるよ!!」

王さん、話止めてくれてありがとう・・・。

「わーってるわ!アーサーさんとこまで連れてけばええんやろ!!」
アントーニヨは少し頬を膨らませながら言った。俺の方に顔を向けると勝手に自己紹介を始める。

「俺、アントーニヨって名前なんやけど、みんなには親分って呼ばれてんで!お前も俺のことは親分って呼んでえな!自分、名前なんていうん?」

「俺、イタリア。パスタとピッツアが大好きなお茶目さんですよ、ろしくね」

俺はアントーニヨが悪い人ではないと分かり、元気に自己紹介した。(最初この世界に来た時は、何がだか分からなくて、やっていけないんじゃないかって心配してたけど、みんないい人そうだし、なんとかやっていけるかも・・・!!)俺は、少しうれしくなった。

「アントーニヨ。そいつのことは任せたあるよ!!」

王さんは、グッ!と親指を立てながらウインクをして俺のことを送り出してくれた。

アーサーと言う人の部屋に行く途中、親分は俺にここの事を教えてくれた。

「ええか?ここではな、名前が変わんねん。アーサーがそれぞれに名前つけるんやけど・・・何のために付けるんやろな?・・・。まあ、ええか。でな、本当の名前を忘れると、帰り道が分からなくなるんやっ。名前、大事にしいや。親分はもう忘れてしもうたけど。」
その他にも、この世界に入った瞬間、異世界人は前までいた世界の事を忘れてしまうこととか、俺みたいに名前を覚えてるヤツもあんまりいないとか・・・。いろんなことを教えてくれた。そんな事を

話しながら俺たちはアーサーの部屋へと向かっていく。しかし2回目のエレベーターの乗り換えの時、親分から異世界人の匂いがするとか何とかで親分はバッシュと言う人に捕まってしまったが、親分はうまく俺の事をエレベーターに押し込んでくれたのでなんともなかった。親分は・・・まあ、自力でなんとかするだろう・・・。

エレベーターが麻屋最上階に着き、エレベーターの扉がゆっくり開く。最上階には他の階とは違う雰囲気が漂っていた。他の階よりうす暗く、静かで、何より怖い。エレベーターから少し歩いた所に大きなドアが現れた。直感で、この先にがアーサーの部屋があるのだと分かる。俺は、そのドアの取っ手に手をかけた――。

――「・・・・。来たみたいだな。イタリア・ヴェネチアーノ・・・」

俺の机の上にある水晶玉には、扉の取っ手に手をかけるイタリアの姿が映っている。

（また・・・一人、集まったな・・・。）

俺はひとり、水晶玉を見ながら怪しい笑みを浮かべた――。

麻屋最上階（後書き）

まだジブリとお話が変わりませんね……。本当にすみません。できる限り皆さんにニコニコ動画での感動を……。！って、前にも言った気がします……。もうボケが始まったのでしょうか……。まあ、がんばって次話も投稿したいと思います！

アーサー・カークランド（前書き）

ついに俺は、麻屋最上階のアーサーの部屋にたどり着いた。そこにいたのは、少年でも、老人でもなかった。そこにいたのはただ一人。眉毛の太い青年だった。ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」小説化してみた

アーサー・カーランド

「ちよっ！！バツシュ！！勘弁してえな！！あれは、王^ワさんの孫や！ならえやないか！！」

アントーニヨは、両手を合わせてバツシュに頼み込んでいる。

「アイツに孫などおるわけなかるう！！嘘^{ウソ}についてはいけないのである！！」

バツシュはアントーニヨの話に聞く耳持たない。本来ならば無視している所だったが、お客様の迷惑にならないか心配だったので言い争いを止めに二人の所へと歩いた。

「全く！！何をしているのですか？！このお馬鹿さんが！！こんなところで言い争っているはおお客様の迷惑になるでしょう！？そんなことも分らないのですか？！」

私は二人の事を叱りつけた。すると二人は私にまで言いかかってきた。

「なんであるか貴様は！！父役だからと言って威張らないでほしいのである！！それに、貴様の声の方が吾輩たちの声より大きいのである！！！！」

「そうやで！ローデリヒ！！それに、これは俺たち二人の問題なんや！手え出さんというて！！」

二人が私にまで乱暴な言葉を向けるものだから力チン！ときてしまいまして。

「なんなのですかその口のきき方は！！本当にあなたたちは！！いつになったら――！！！！！！」

その言い争いはしばらく続いたという・・・。

エレベーターを降りてから少しの所にあるドアの先にもいくつかドアがあった。が、今度のドアは今までのとは桁違いの大きさをしている。このすぐ先にアーサーが待ち構えているのだろうか。

（アーサーってどんな人なんだろう……。やっぱり……。怖くて、っ
ーんとして、人を寄せ付けない感じなのかな……。？もしかして、
おじいさん？ あゝあ、親分、アーサーのことはあんまり教えてく
れなかったんだもんな）

・ドツキン……。ドツキン……。

俺の心臓がとても早く動いているのが分かる。これからアーサーに
会いに行くのだから無理もないが。

（ここで働かせて下さい……。ここで働かせて下さい……。）

俺は心の中でアーサーに会った時の為の練習をしていた。俺は少し
の間ドアの前で立っていたが、ついに扉を開ける決意をした。

「よし！ いくぞおゝ！！ ヴェー！！！」

俺は、ドアに掛けた手を引いた。

―ガチャン、ギイ……。―

重々しい音を立て扉が開いた。その先には、さっきまでの様な通路
がある光景はなかった。俺の目の前には、暖炉と、事務机に背を向
けて座っている一人の青年がいた。青年はこちらに背を向けて座つ
ているので顔をよく見ることができなかったが、彼から発せられて
いる雰囲気などから、彼はまだ若く、年老いた老人ではないという
事が分かった。身長はそこそこあるようなので、少年ではない。

「やっと来たみたいだな……。イタリア・ヴェネチアーノ。」

青年は回転式の椅子に座っているようで、くるっと回ってから俺の
方を見てそう言った。彼の顔をようやく見ることができた。彼は、
金色に輝く頭髮、澄んだ緑色の瞳を持っていた。緑の瞳は金色の髪
によく映える。そして、青を基調とした服を身にまとい海賊帽のよ
うなものまでかぶっている。指にはたくさんの指輪をし、耳には大

きな円形型の金色イヤリング。彼を説明する言葉は今まで言った他にもたくさんあるが、なにより目立つのは、眉毛である。ありえない太さをしていた。彼を漢字一文字で表すなら、「眉」である。

（あー！だから建物の旗、眉って書いてあったんだー！！）

今まで生きてきた中でこれほど納得したことはあっただろうか。しかし、そんなことを考えている場合ではない。今、すべきことは他にある。そういえば・・・

「どうして・・・俺の名前知ってるの・・・？君がアーサーなんだよね・・・？」

この人には初めて会ったわけだから、俺の名前を知っているはずがない。俺は疑問に思った。

（ルートといい、アーサーといい、どうしてみんな俺の事を知ってるんだ??）

2、3秒すると、青年はフツと笑ってから俺の質問に答えた。

「俺はお前の予想している通り、麻屋店主あややのアーサー・カークランドだ。なんでお前のこと知ってたかって・・・そりゃあ、お前のことを待ってたからに決まってるんだろ。あ、俺の為だからな！！勘違いすんなよー！！」

アーサーさん・・・思ってたのと、なんか・・・印象違います。

アーサー・カークランド（後書き）

5話まで読んでくださった方がいるなんて・・・！！！！感謝感謝です！皆様に楽しんでいただけるお話を目指して頑張ります！！暇な方は評価・感想の方お願いいたします！ここまで読んでくださったって本当にありがとうございます！

仕事見つかりました。

b yイタリア（前書き）

——俺は、俺の望む世界を作るんだ。誰にも、邪魔はさせねえ・。
・。ニコニコ動画「フェリとイタリの神隠し」〜小説化してみた〜

仕事見つかりました。

b y イタリア

「ここは神の国。お前には国ではなく、人間として働いてもらうぜ。」
「ここには神様がいるようだ。その前に、アーサーは俺のことをなんでも知っているのだろうか・・・？俺が国だということまで知っているなんて。」

（あれ・・・てか俺、働かせて下さいって言ってないのに・・・まあ、いつか働かせてもらえるなら特に問題ないし！しばらくの間元の世界には帰れないのかなあ・・・）

アーサーは机に座ったまま何かを探している。

「ガサゴソガサ・・・」

「お！あつたあつた！」

アーサーはA5サイズ位の紙を持って俺の所まで歩いてきた。そして、先程まで探していた紙と、万年筆を俺に手渡した。

「これ、お前の契約書な。ここに名前書け。」

アーサーは紙の右端を指差した。

（えっと・・・名前書ける所は・・・。）

俺は暖炉の前の石の床で名前を書いた。「イタリア・ヴェネチアーノ」と・・・。

アーサーは俺が名前を書き終わるのを見ると契約書を俺の手から取って、しばらく俺の名前を眺めていた。寂しそっただけ嬉しそうな目で。アーサーは俺の名前の上に手をかざした。すると、俺の書いた名前がアーサーの手へと吸い込まれていく。吸い込まれた字と入れ替わるようにして違う文字が手から出てきて紙に張り付いた。

「いいか、これからお前の名は「フェリシアーノ・ヴァルガス」だ。分かったら返事しろ！」

「は、はいいい！！！！」

突然言われたものだからびっくりしてしまった。

アーサーは俺を指差しながら自信満々の顔で言った。

「よおし！！そうと決まればお前は今から俺の部下だ！！分かったな！？」

その後、天井からぶら下がっているロープを2回引いた。誰かを呼んでいるようだ。2分位すると、俺が入って来たのとは違うところから少年が現れた。

——「お呼びですか？アーサー様。」

俺は自分の目を疑った。なぜかって、そこにルートがいたからだ。まさかここでルートが来るとは思っていなかった。俺は驚きすぎて声を出すことができなかった。アーサーは目を見開いて静止している俺（珍しいよね。開眼してる俺。なんで気づかなかったんだ・・。）を気にも止めず話し出す。

「今日から、コイツがここで働くことになった。アントーニヨ達んとこまで連れてけ。ああ、ローデリヒ達にも紹介しておけよ！」

俺はルートに連れられ部屋を出て、エレベーターに乗った。

——ガチャン。

ドアが閉まり、二人の姿が見えなくなった。

「..... また一人集まったな.....」

俺は、二人が出ていった扉を見つめていた。すると.....

「あゝちゃゝどうちたの？あの人、異世界人なんだよねえ？ここで

働かせていいの？」

俺のズボンを掴み、俺を見上げながら小さなアルは言った。腕には白クマの人形を抱えている。

（いつの間に一人で歩けるようになったんだ！！??）

「あるうううう！！！！いい子にねね出来てたなあ！歩けるようにもなつて！！さすがは俺の弟だ！！」

アルに頬ずりをしたら、嫌がられた……。うつ……。泣く。

「ねえ、いいの？」

アルはどうしても気になるようで、ズボンを引っ張って俺に聞いてくる。アルに教えるつもりはなかったのだが。。

（仕方ないな。。。）

「アイツは異世界人だけいいんだ。アイツは人じゃなくて国なんだ。だから。。。いいんだ。これで満足か？アル？」

俺はアルの目線に合わせて座って本当のことを教えた。アルは疑問が解けて嬉しそうな顔をしている。

「うん！！わかったんだぞ！教えてくれてありがとう！あーちゃー！！」

（この顔がかわいいんだよなあーこの時代のアルは。。。）

——絶対、俺の望む世界を作ってみせる。見てろよ、イギリス。。。

仕事見つかりました。

b yイタリア（後書き）

今回の話はいつも以上にぐちゃぐちゃですね。わかりにくい所があったら教えてください！頑張って直します！6話以降もよろしくお願いします！

結成。麻屋トリオ。（前書き）

——「名前、大事にじいや。」俺は親分の言ったことを軽く流していた。自分の名前なんて、忘れるわけないから——
二二二
コ動画「フェリとイタリの神隠し」を小説化してみた

結成。麻屋トリオ。

俺たちはエレベーターを3回乗り換え、階段を降りて広場のようなところに出た。するとそこには親分がいて、何やら心配そうな顔をしている。横にはそれをアホらしいといった感じに見ている少年がいた。頭からはくると一本、毛が生えている。

「あ・・・おやぶ・・・」

俺は親分に近づこうとしたが、ルートに腕を引っ張られてしまった。「こっちの方が先だ。アイツとはまた後で会えるから心配するな。」ルートは俺の手を引いたまま、広場のような所の端の、机が置いてある所まで歩いていく。

「ん・・・ああ、ルートヴィツヒ。その方がフェリシアーノさんですね。先程アーサーから連絡が来ました。アントーニヨの所で働かせると。」

机に、父役：ローデリヒと書いてある札が置いてある。その位置に座っているのだからこの人はローデリヒという名なのだろう。その隣にはさっき親分を捕まえていた人が座っている。札には、兄役：バッシュと書かれている。

「ああ。その前に皆に紹介した方がいいだろうか？」

ルートはローデリヒという人に首をかしげて聞いている。

「いえ。別にいいでしょう。どうせアントーニヨが部屋で皆さんに教えて回るでしょうし。」

ローデリヒは親分の方を見ながら言った。

「そうだな。おい、アントーニヨ！！こっち来い！！」

ルートは遠くにいる親分に聞こえるような大きな声で親分を呼んだ。すると、さっきまで心配そうな顔をしてオロオロしていた親分は、俺を見つけた瞬間パアツと明るい顔になり、こちらに走ってくる。

「いったちゃーん！！」

（え・・・？イタちゃん・・・？って誰だっけ・・・）

「アントーニヨ。コイツはフェリシアーノだ。これからお前とロヴィーノの班で働くことになる。頼んだぞ。」

ルートはそう親分に伝えた。そう、俺の名前は、「フェリシアーノ」だ・・・。

「ん・・・。ああ、わかったわ。任しとき!!」

親分は親指を立ててウインク、俺を送り出してくれた時の王さん^ワみたいな感じ（もろかぶっている）でルートに話しかけた。

「ロヴィーノ。コイツは今からお前の子分や！しっかり仕事教えるんやで！」

親分は隣にいるロヴィーノという少年にそう言った後、ロヴィーノが答える間もなくしゃべりだす。

「ほな！俺、他の奴らにもフェリちゃんの事紹介せんといかんから。また明日な!!」

親分は、ルートやローデリヒさん、バツシュさんに軽く挨拶をすませ俺とロヴィーノの腕を引き、そそくさと広場を立ち去った。

「ふう・・・。フェリシアーノ!!あかんやないか!!俺との約束やぶつてしもたら!!」

灯りが付いていない月明かりのみに照らされているうす暗い部屋で、親分がいきなり俺にお説教を始めた。

「やく・・・そく・・・???」

俺はなんの事だか分からなくて首をかしげた。すると親分は一回溜息を吐きだして。

「名前、大事にせえって言ったやないか・・・。」

親分は目線を下に向けている。少し怒っているのだろうか。

「あ……。」

俺は親分に言われて思い出した。自分の名前が「フェリシアーノ・ヴアルガス」ではないことを。そこまでは思い出せたが、自分の本当の名前が思い出せない。

「自分の名前、覚えてないんか。もうみんな記憶書き換えられてしまてるで。俺も、さっきまで覚えとったんやけど……。」

（え……？）

「お前がよく考えないでコイツの名前大声で言ったからだぞ！ばかやろー！！あん時お前が名前呼ばなかったら、ルートはみんなに忘却魔法かけなかった！！」

ロヴィーノはちぎーといった感じで親分の事をつついていいる。

「しゃあないやないか！俺、そこまで考えられるような頭もってないわ！」

それから3分くらい親分とロヴィーノの言い争いは続いた……。

「こうなったら最後の手段や……。みんなで自分の名前を取り返しに行くで！6つ先の駅らへんに住んどる「フランス」ってヤツがホンマの事知つとるて聞いたことあるわ！」

親分は言い争うの途中で思いついたらしく、フランスという人の所へ行こうと言い出した。

「本当か！？このやろー！で、切符はどこにあるんだ？！」

ロヴィーノは目をキラキラ輝かせて親分に聞いている。

「あ……。ないわ。」

「「え……。。」」

しばらく、元の世界には帰れなそうです……。

結成。麻屋トリオ。（後書き）

なんだか最近、ただでさえボロクソな文法がボロボロクソクソになってますね。こんなになっても読んで下さる方感謝ですよ！！頑張って完結させたいと思います！（まだ当分続くのかなぁ・・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0754z/>

フェリとイタリの神隠し

2011年12月10日09時50分発行